

鳥取県青少年育成アドバイザー 協議会通信

鳥取県青少年育成アドバイザー通信 59号
鳥取県青少年育成アドバイザー協議会
発行日 2011. 9. 21
編集 芳村恵子
〒680-0002 鳥取市浜坂東 1-10-15

第17回中国・四国ブロック
青少年育成アドバイザー研究集会徳島大会

H23年9月10日・11日、

研究テーマ「私ならこうする」に参加して

西浦 公子

今年は、徳島県三好市が会場でした。三好市は四国のど真ん中に位置するところで、山と谷底には、緑色の水が流れる、吉野川…どうやってあんなところに家を建てたのだろうか？？？と思うようなところに家がある、めずらしい風景のところでした。三好市は市の面積の98%が山だそうです。

まず、10日は、開会行事の後に、ユースアドバイザー（若者の自立支援のための専門相談員）について、上坂町教育委員長の講演を聞きました。

その後、大歩危、小歩危、祖谷の蔓橋…そして、鬼太郎の児啼爺の出身地だとのことで、鬼太郎などの妖怪が展示してある「大歩危道の駅」その2階には「石の博物館」があり、めずらしい石やきれいな石がたくさん展示してあるところを見学し、宿に戻りました。少し休憩をして、夕食前には、徳島県ならではの「阿波踊り」みんなで輪になって踊りました。各県の自己紹介や出し物などがあり、和やかな夕食会でした。

11日は、3分科会に分かれ、私は第一分科会に参加。西上さんは第3分科会に参加。どの県も、高齢化と、新会員がないとのことが悩みでしたが、島根県は、今年の秋から、独自の養成講座を開始されるそうです。来年度の開催県、広島県の是非おいでくださいのあいさつを最後に、来年また会いましょう。と再会を約束して、お別れしました。

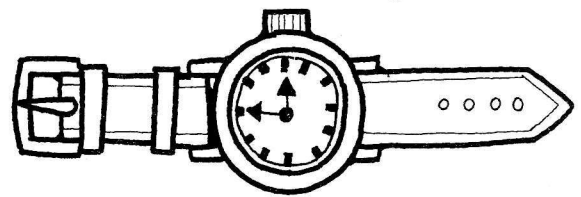
24時間営業のコンビニで失われたもの

西上 洋治

名目は利用者の利便性に配慮したものであるといわれていますが、実際は消費者が求めているというより、経営者側のシェア争いの結果、他の店よりサービス時間の延長競争が続き、とうとう24時間営業になってしまったというのが実情ではないでしょうか。

そこで働いている人は疲弊し、営業時間の延長に比例して売り上げが伸びるはずもなく、誰のための、何のための24時間営業なのか、ちょっと立ち止まって考えてもいいのではないのでしょうか。

24時間営業でいつでも欲しいときに物が手に入るとすると、人は「備え」ということを忘れてしまいます。私たちは先祖から物があつた時には貯え、無い時に備えた生活をするを教えられていたのです。何が起きるか分からない、そのことに備えることは生きていく上で大切なことです。



どんなことでも保障されすぎていると自分のことさえできなくなってきました。想像力が衰え、広い視野で、また長い年月でものごとを考えることができなくなり、他者を思いやる気持ちも薄らいでしまいます。

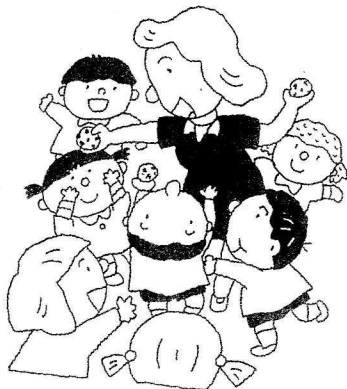
コンビニの営業時間をあたり前の人間の生活リズムに合わせて制限できないものでしょうか。一人ひとりが将来を考え、行動できる力を身につけていきたいものです。

今自分たちは、自然や社会、「いのち」まで操作可能と思いついていませんか。自分自身が生きとし生けるものつながりの中で生かされていることを忘れてしまったかのような有り様です。お金を出せばコンビニでいつでも何でも手に入れることが可能な社会になっています。本当にこんな姿でいいのでしょうか。

生の野菜の味を知らない子が数多くいます。ましてや泥の付いた野菜を見たことが無い子がいるのにはびっくりしました。でも、これからは放射能や酸性雨等から守るため安全な工場の中で人工的に野菜もつくられるようになるかもしれません。

このような状況であればこそ、私たちは「いのち」そのものへの思い上がりを戒めなければいけないのではないのでしょうか。食育の推進が叫ばれていますが、教える者自身が、まず「いのち」への畏敬を学びえているのか、改めて自戒して出発したいものです。

人として当たり前のことを当たり前にできるようにすることが大切です。視聴覚機器を使うことによって、教師の「語り」の力が萎縮してきているように感じますが、どうなのでしょう。各家庭では、子どもにテレビやゲームを与え、子守りを機械が肩代わりし、大人が子どもたちに対して語りかけることが限りなく希薄になり、捨て子状態に追いやられていると言っているのではないのでしょうか。だからこそ、親も教師も自分の言葉でしっかり子どもに語りかける時間をつくり、日々継続してやっていきましょう。子どもの居場所づくりのためにも、ぜひお願いしたいものです。



先日、中村文昭さん(クロフネカンパニー代表取締役)の講演会を聞きました

『返事は、0.2秒』

『頼まれごとは 試されごと』

『期待を上回るサービスを』迫力ある、笑い話のような、本当の話に、とりぎん文化会館の梨花ホールに集まった、1700人の人たちは引き込まれていき、うなずき、笑い、そして、最後は、みんなの顔が、やる気になって、目がキラキラ キラリン！！になって帰られました。



「隠しておきたいような過去を
感謝に変える」話をお伝えします。

中学校になったとき、3つの中学校が1つになり、政権争いをしていた時、人のことを考えない中村さんは、「あれやっつけ!」「これやっつけ!」と、人に命令ばかりしていたら…あるとき、クラス全員から、まったく口をきいてもらえなくなった。だんだんいじめは、エスカレートし陰湿になっていった。履こうと思った靴には牛乳が入っていたり、机を3階から投げられたり・・・

かわいがってくれるのは、暴走族だった。ガソリンを盗んで持っていったり、おじいさんの財布からお金を取って、たばこを買って行ったり…だんだんと盗みもエスカレートし、ついに警察に捕まって、親が呼ばれることになった。その時、お母さんが「こんな子に育てて、申し訳ありません、すべて親の責任です。」と謝られた。

ある日、お母さんが夜中に包丁を持って枕元に立ち「死んでくれ、後からお父さんも、

次のページに続く

私も死ぬから、先に行って待っていてくれ・・・」と言われた。とりあえず、包丁を取り上げたが、お母さんは、文昭さんを、殴って、殴って、殴って、ぼこぼこになるくらい殴って、自分の両手の指が骨折したそうです。

そして、お墓に連れて行き「ご先祖様に謝れ！」お宮に連れて行き「神様に謝れ！」

しかし、「何か私に隠していることがあるだろう、白状しなさい!!!」と言われ、「実は、1年1か月、だれも口をきいてくれない・・・自分が謝ることができなかったことが原因だった。苦しくて、橋から飛び降りて、死にたいと思ったこともあった・・・」と、話した。その夜は、帰って寝たが、次の朝、起きたら、お母さんがいない、しまった学校に行ったんだ、「うちの子が、いじめられているのに、何で止めてくれなかった、死のうとまで思っていたのに・・・」と先生に、文句を言いに行ったのだ!!!と思って、急いで、はれ上がった顔のまま、学校に行ったら、案の定お母さんは職員室におられた。

しかし、お母さんは、文句を言うのではなく土下座をして「うちの子が一人いることで、授業もしにくかったですし、運動会などの集団行動もやりにくかったです。大変申し訳ありませんでした。すべて親の責任です。どうか許してください。できれば、あと1年半の中学校生活を、送らせてやってください」と、たのんでおられたそうです。それを見た、文昭さんは、ワァ～～～と泣きながら、教室に行き、クラス全員の前で、「悪かった、許してくれ、あの時 謝ることが出来なかった、許してくれ」と土下座をして許しを乞うたそうです。

中学校でいじめられていたことは、だれにも言えなかったのですが…、大人になって言えるようになったとき、このいじめがあったからこそ、今の自分があると考えることができるようになった。未来と自分は変えること

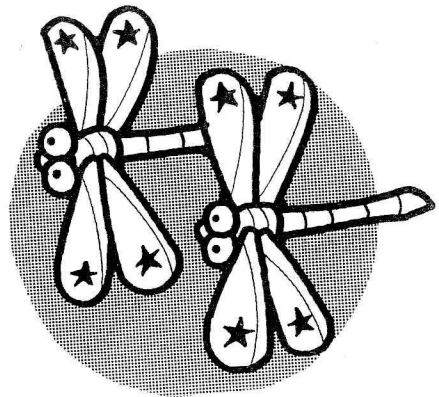


ができるが過去と他人は変えることができないというのが、過去に感謝するようになると過去は変えることができる。過去を感謝に変えると、自分に自信がつく。自分に自信がつくと、前を向いて生きることができる。

今、中村文昭さんは、引きこもりに人たちに、北海道で、生きるという事を農業で体験する場を提供されています

中村文昭さんの講演会が、11月7日、鳥取市民会館であります

*10月8日の研修会、楽しみです。いつも優しい笑顔で、私たちを支えてくださっている伊藤肇さんのお話が聴けるなんて、嬉しいです。皆さん、参加しましょうね。



編集後記

今年は、自然災害があちこちで起こり、悲しいこともいっぱいです。

それでも、自然はそろそろ秋を運んでくれて、草の陰から虫が鳴き、果物も美味しく実り、稲も黄色くなってきました。

お待たせしました!!

通信59号が出来上がりました。心温まる原稿をありがとうございました。

次回はいよいよ60号です。皆さんの思いを活字にして届けてください。

お待ちしております。

oine.oine.oinechan@fork.ocn.ne.jp
(word で入れてください)